

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(34) 平成13年11月1日

江戸時代の旅の情報誌(3)

『みちのりはやざんどうちゅうき 道法早算道中記 - とうかいどうなかせんどう 東海道中仙道 - 』(Q291/5)

庶民の物見遊山の旅は江戸時代中頃から次第に盛んになり、宿場には旅籠屋はたごやが立ち並び、名所・旧跡には多くの人々が訪れるようになりました。そして、この頃から各宿場の様子や駄賃、街道筋の名所・旧跡や名物を紹介する様々な道中記や地誌などが多数刊行されました。その多くは挿し絵をみているだけでも楽しくなる絵中心のものでした。ただ、各宿場間の距離しか記していないため、次々宿場、あるいはさらにその先の宿場まで、さらには駿府から京都までの距離を知ろうとすれば、各宿場間の距離を加算しなくてはわかりませんでした。

そこで出版されたのが『道法早算道中記 - 東海道中仙道 - 』です。その詞書には、「街道の行程を書き記したものは多くあるけれども、どれも中途の宿駅から宿駅までの行程を知ろうとすれば、計算道具を用いなければならず、苦労は多くて煩わしい。といて道具を使わなければ判然としない」ためこの道中記を出版したとあります。

本書は、東海道(53次)と中仙道(69次)の宿場間の距離のみを記した1枚刷りで、携帯できるように折りたたみ式となっています。現代の高速道路の料金・距離表や、時刻表の運賃表と形式は同じです。任意のふたつの宿駅の交わるところをみれば、その宿場間の距離を知ることができるのです。文字ばかりの道中案内ですが、折りたたんで旅に携帯することができる、実用本位な旅の情報誌といえます。

江戸時代の旅は、「お江戸日本橋七つ立ち、初上り」とうたわれたように、朝まだ暗い時間(七つは午前3~4時頃)に出発し、日がまだある内に次の宿泊先に到着するように心がけていました。比較的安心して旅ができるようになったとはいえ、旅には様々な危険が伴っていましたから、地理に不案内な旅先では暗くなってからの道中はさける方が無難でした。人々は休憩を含めて一日約13時間かけて、男性は約10里(1里は約4キロメートル)、女性を伴う旅ですと約8里(約32キロメートル)歩いたようです。

男性を例に取れば、江戸日本橋を出立して、戸塚宿(神奈川県)までが10里18丁(1丁約109メートル)は、戸塚宿から小田原宿までが10里2丁、小田原宿からは9里半で沼津宿に到着します。じっぺんしゃいっく 十返舎一九の『とうかいどうちゅうひざくりげ 東海道中膝栗毛』の弥次郎兵衛・喜多八の二人も、一日目は戸塚宿、2日目は小田原に宿泊しました。ところが、3日目は沼津ではなく、三島宿に、しかも夕暮れ時に到着しています。この日の二人の行程は8里でした。これは「天下の険」と呼ばれる箱根の峠越えがあったからです。一日に約10里を歩くとっても、山道では歩く速度は落ちるでしょうし、また大きな河川では川越に時間がかかったことでしょう。

距離のみを記したこの『法早算道中記 東海道中仙道』だけから旅行の計画をたてることはできませんが、それでも宿場間の距離を順次加算する煩雑さを考えれば、この早見表の登場は画期的なものであったといえましょう。1818(文化15)年に初版が出た後、1830(文政13)、1852(嘉永5)年と版が重ねられています。本館はこの第3版を所蔵しています。

<参考文献>

『道中記集成』第11巻(291.09/㊦)